

常設展示のご案内 2026～

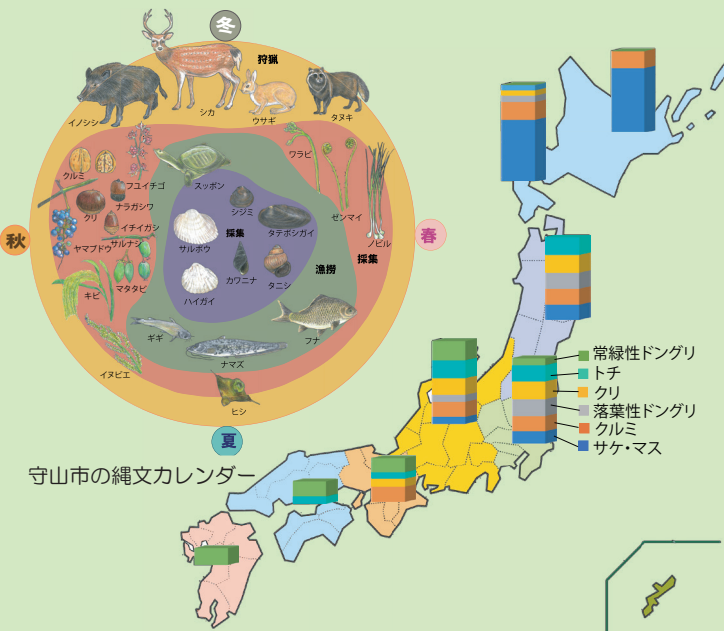


1 縄文時代～営みの始まり～

縄文時代とは、日本列島の人々が初めて土器を使って生活するようになった時代です。およそ16,500年前に始まり、弥生時代まで1万年以上も続きました。

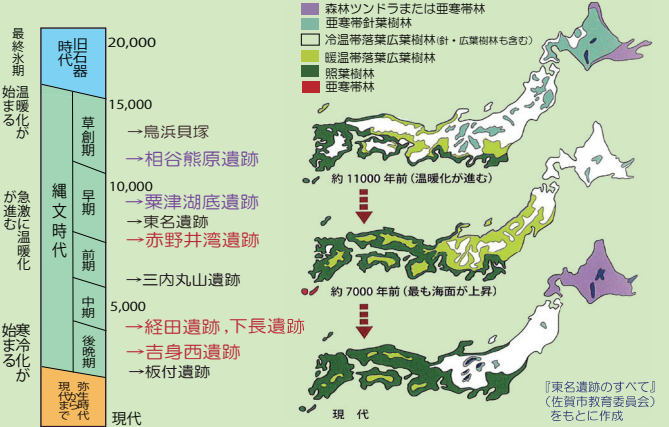
縄文時代がいかに長く続いたかをカレンダーで表現すると、縄文時代が1月～10月を占め、残り2か月が弥生時代から現在の歴史となります。

守山市内の縄文時代の遺跡は、現在31遺跡を数えます。稲作が始まる弥生時代以降の遺跡に比べて少数に留まりますが、この現象は守山に限らず西日本全域に共通しています。東日本に比べて、自然界に食料を求める狩猟採集生活にとっては豊かな土地ではなかったことに起因します。



旧石器時代	縄文時代					弥生時代
	草創期 約16,000～ 11,000年前	早期 約11,000～ 7,000年前	前期 約7,000～ 5,500年前	中期 約5,500～ 4,400年前	後期 約4,400～ 3,200年前	晩期 約3,200～ 2,500年前

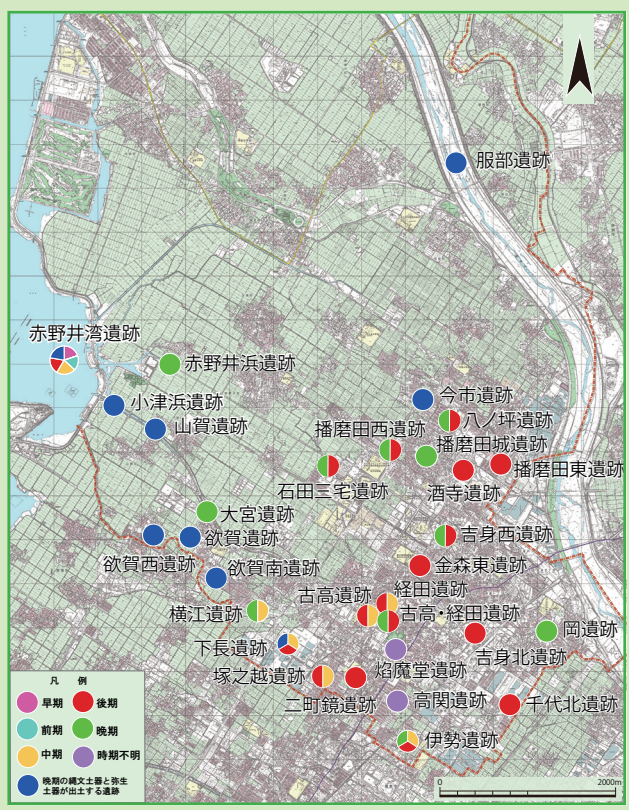
地球温暖化と縄文海進



縄文時代早期～中期 縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6時期に区別されています。

守山市内で最も古い遺跡は、約8,500年前の早期末の赤野井湾遺跡で、その後も前期後半(6,000年前)以降、中期、後期、晩期と断続的に営まれていたことがわかっています。現在は琵琶湖の水面下約3.7mの深さにありますが、当時は水位が低く琵琶湖の岸辺にあり、おそらく、湖岸周辺は比較的安定して食料採集が可能で、住みやすい場所であったでしょう。

中期(約5,500年前)以降は、遺跡の数が多くなっていきます。経田遺跡(今宿町)や古高町の下長遺跡、



守山市の主な縄文時代の遺跡

つかのこし 塚之越遺跡、ふるたか 古高遺跡など、琵琶湖を離れ、かつての野洲川主流であった境川の自然堤防に営まれるようになります。

経田遺跡では、東海地域の特徴をもつ咲畑式土器や定角式石斧、磨石などの石器が出土しています。同じく塚之越遺跡では、打製石器の石材であるサヌカイトの集積遺構とともに中部～関東地域特有の有孔鏝付土器が出土しています。

縄文時代後・晩期 吉身西遺跡の集落からは、巻貝による特徴的な文様をもつ後期末(3,200年前)の宮滝式土器が出土しています。竪穴建物からは、打製石鏟やその未製品、石材のサヌカイト、ヒスイの丸玉や工具の敲石が出土していて、石器づくりの工房跡と考えられています。

縄文時代の近畿地方では、滋賀県では産出されない、奈良県と大阪府にまたがる二上山や金山(香川県)で採取されたサヌカイトが、石器の石材として流通していました。ヒスイなどの原石も日本海側の産地から、おそらく水運によって搬入したものと考えられます。

縄文時代晩期(3,200 ~ 2,500 年前)の下長遺跡では、ヒエやアワなど雑穀類の圧痕がついた凸帯文土器(西日本の晩期の縄文土器)が見つかっていて、このような雑穀栽培の始まりを契機に、沖積平野全域に集落が広がっていったと考えられます。

播磨田城遺跡では、旧河道から晩期末の土偶の頭部2点が出土しました。その額や頬にはイレズミを表現した線刻が施されています。この土偶は主に東日本の縄文遺跡で出土し、黥面土偶と呼ばれており、東日本地域との交流を示す資料と言えます。

このように、縄文時代中期以降の守山は、西日本はもとより東日本の文化をも受容し続けてきたことがわかります。その背景には、現代人の予想をはるかに超えた人々の闊達な交流や交易があったと考えられます。

縄文時代から弥生時代にかけての日本列島の人口の動向について、歴史人口学では、右下の表のとおり、縄文時代には東日本に圧倒的多数が生活していたのが、弥生時代後期にあたる1800年前には西日本が凌駕すること、縄文時代後期から晩期にかけて、人口そのものが激減するという結果を導き出しています。



縄文時代中期末土器文化圏と石材の産出地との文化交流



経田遺跡出土の深鉢

有孔罎付土器 (塚之越遺跡)



播磨田城遺跡出土の土偶



吉身西遺跡出土の土器

このことは縄文時代に始まった地球規模の寒冷化に見舞われたことを反映しており、寒冷化による主に東日本での食糧不足から、西日本への人々の移住や往来が進み、東西間の交流をより活発化させたのかも知れません。

縄文時代～弥生時代の人口推移

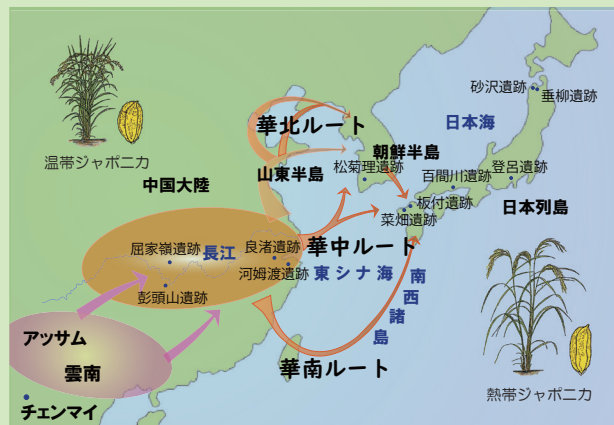
時代・時期	縄文時代					弥生時代
	早期	前期	中期	後期	晩期	
	8100年前	5200年前	4300年前	3300年前	2900年前	1800年前
東日本	17,000	96,500	251,800	140,700	64,900	292,600
全人口(%)	86	91	96	88	86	49
西日本	2,800	9,000	9,500	19,600	10,900	302,300
全人口	20,100	105,500	261,300	160,300	75,800	594,900

小山修三氏作成資料(1984)を一部改編

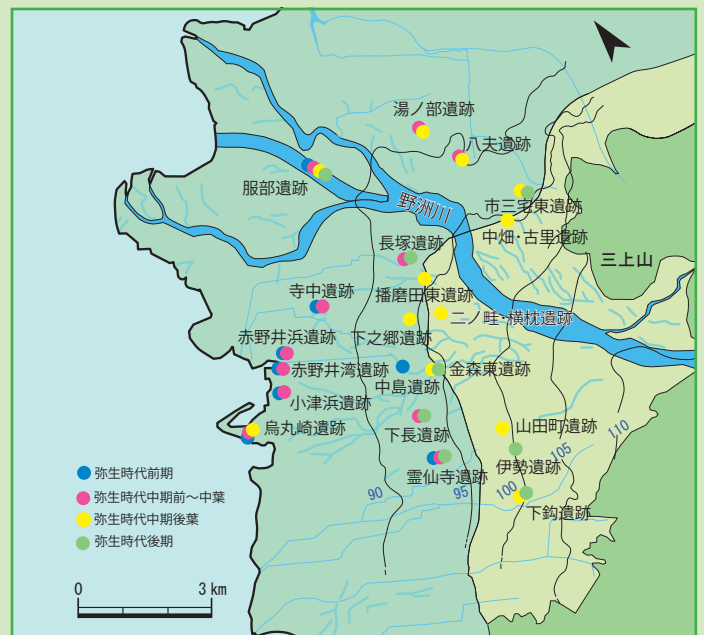
2 弥生時代～稲作の始まり～

弥生時代は、稲作農耕が始まった時代と定義されています。稲作は、紀元前10世紀に北部九州で始まったことが様々な分析結果から定説化しつつあります。

服部遺跡でも、昭和53年(1978)に弥生時代前期の水田跡と稲作の指標とされている遠賀川式土器が見つかっています。遠賀川式土器は福岡県遠賀川下流で出土したことから名付けられた弥生時代前期の土器で、甕や鉢に加え、壺、高坏の器種が見られます。この土器は、稲作が始まっていたことの指標になっていて、遠



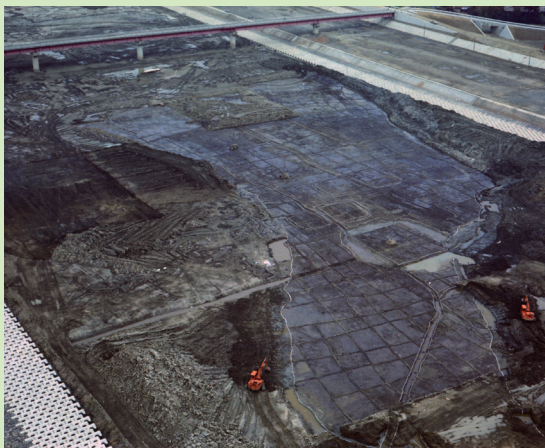
稲作の伝播ルート



野洲川下流域の主な弥生時代の遺跡

遠賀川式土器の出土する西日本一帯は弥生時代前期のうちに稲作が普及したことがわかります。

その背景として、大陸や朝鮮半島からの渡来者に加え、縄文時代晩期以降、東日本から西日本への移住者が大変多かったことが考えられています。



服部遺跡の水田跡検出状況

遠賀川式土器と稲作文化 服部遺跡では、10～200㎡の小区画水田跡約260区画が検出されています。その面積は約18,700㎡で、おそらくその数倍の広さの水田域があったと推定されています。

高低差のある自然地形を利用した稲作であるため、稲の生育に欠かせない用水が万遍なく行き渡るように地形に合わせて畔付けを行った結果、現在の水田と比較して、狭くて不均一な水田が誕生したと考えられます。

服部遺跡では、水田跡とともに遠賀川式土器が出土していて、弥生時代前期の水田であることが分かりました。この土器は、西日本各地の前期の遺跡で出土しています。広い範囲で同じような土器が使われた背景には、稲作と共に広がったためと考えられています。

つまり、遠賀川式土器が出土する地域は、稲作農耕を受け入れた地域と換言できます。

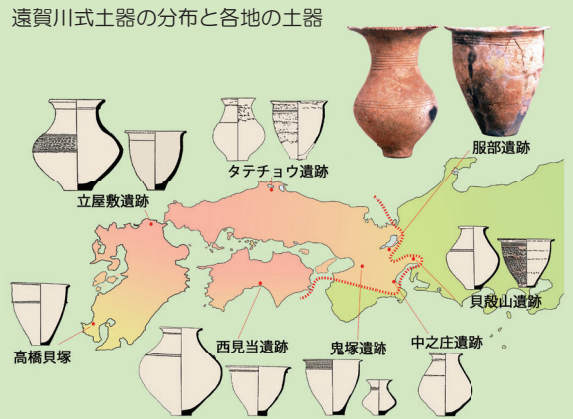
弥生時代前期の水田、あるいは遠賀川式土器が見つかる野洲川流域の遺跡は、小津浜遺跡(杉江～山賀町)や草津市・烏丸崎遺跡など、その多くが琵琶湖の湖岸近くに位置しています。稲作を始めたばかりの頃は、灌漑などに労力を費やすことの少ない後背湿地を水田にして始まったことが想像できます。

さて、遠賀川式土器の出土土層からは、縄文文化ともいえる凸帯文土器や石棒も出土しています。このような共伴事例は服部遺跡以外でも知られていて、東漸してきた弥生人と在来の縄文人の協業が稲作農耕の普及の原動力になったというストーリーを思い描くこともできます。

稲作文化は稲作の農耕技術にとどまらず、農耕生活全般に必要なノウハウが収納されたオールインワンの文化であり、木材の伐採や加工に使用する磨製石斧や磨製石鏃など、表面を磨いて仕上げる大陸系磨製石器を伴っています。



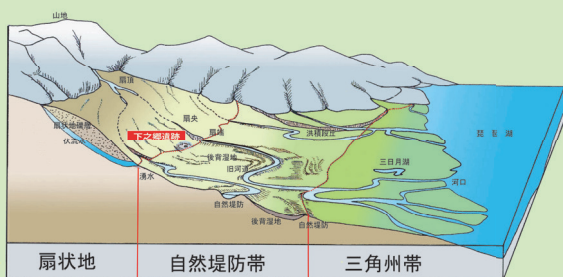
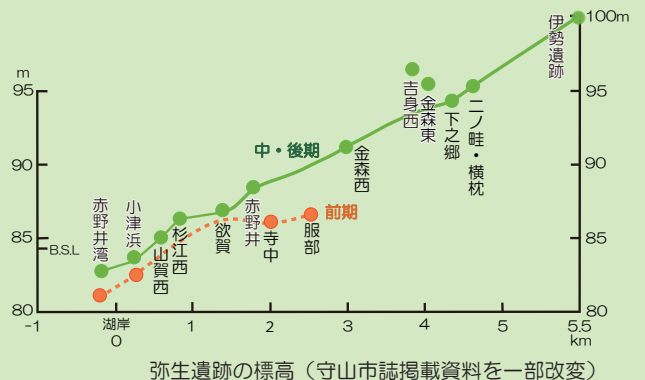
上：縄文時代晩期～弥生時代前期の土器(服部遺跡)
右：打製石器と大陸系磨製石器(中島遺跡)



しかし、新たな大陸系磨製石器が登場する一方で、サヌカイト製の打製石鏃や磨石、敲石といった縄文時代からの伝統的な石器も引き続き使われています。

3 弥生時代中期～内陸部への進出～

野洲川流域の弥生遺跡の分布を俯瞰すると、時代を追って湖岸縁から内陸部へ移行する傾向が看取できます。服部遺跡や小津浜遺跡などで始まった湖岸縁の稲作水田は湿潤過多で排水が課題となります。低生産性と水害のリスクを抱えながらの稲作でしたが、人口増や農閑期の労働力の余剰が生まれ、そのことによって、内陸部への進出が始まったと考えられます。



下之郷遺跡の立地と平野モデル

弥生時代中期になると、およそ標高84m台の琵琶湖岸で始まった稲作を生業とする集落は、標高90m台の内陸部に到達し、中期末には、野洲川伏流水の湧水がみられる扇状地に占地する下之郷遺跡に環濠集落が出現します。より広大で効率的な生産基盤を求めて水系を遡り、内陸部に拠点を移す過程で、水や土地争いを統制するために各集落が農業共同体を形成し、その拠点集落として環濠集落が出現したと理解することができます。

弥生時代中期の服部遺跡と方形周溝墓群

野洲川流域の集落が内陸部に拠点を移す中、服部遺跡では、中期以降もここにとどまっていたことを弥生時代中期全般の方形周溝墓群が示しています。その数 360 基以上に上り、その当時の常識を覆す発見となりました。

調査成果の近年の精査から、服部遺跡の中期集落では、3～5 家族で構成される 12 の集団（大家族）が生活し、それぞれが方形周溝墓を継起的に築いた結果、このような墓域を形成したという考えが示されています。



連続と築かれた方形周溝墓群

受口状口縁甕の出現



波状口縁甕（服部遺跡）



受口状口縁甕（下之郷遺跡）



磨製石剣（左・中：服部遺跡
右上：下之郷遺跡）

さて、この方形周溝墓や集落からは、中期前葉から終末に継続する弥生土器が出土していて、野洲川流域の弥生土器の変遷を知ることができます。

前期の斉一的な遠賀川式土器に対し、弥生時代中期前葉の土器には、各地域毎の特徴が萌芽します。滋賀県（近江）では、甕に地域色が顕在化しはじめます。く字状口縁甕の口縁の周囲 4 か所を山形につまみ上げる波状口縁甕が現われ、中期後半になると、口縁部が屈曲して立ち上がる受口状口縁甕が誕生します。

受口状口縁甕の特徴はその形態以外にも、煮炊き用の器種にもかかわらず、櫛描き列点文や直線文、波状文、円弧文などの多彩な櫛描文様帯を口縁部から上部にかけて何段にもわたって施文される点があります。野洲川流域では、湖東や湖北、湖西といった他地域に比べ、遺跡は異なっても施文の丹念さは規範的で、形態や施文に高い類似性が認められます。

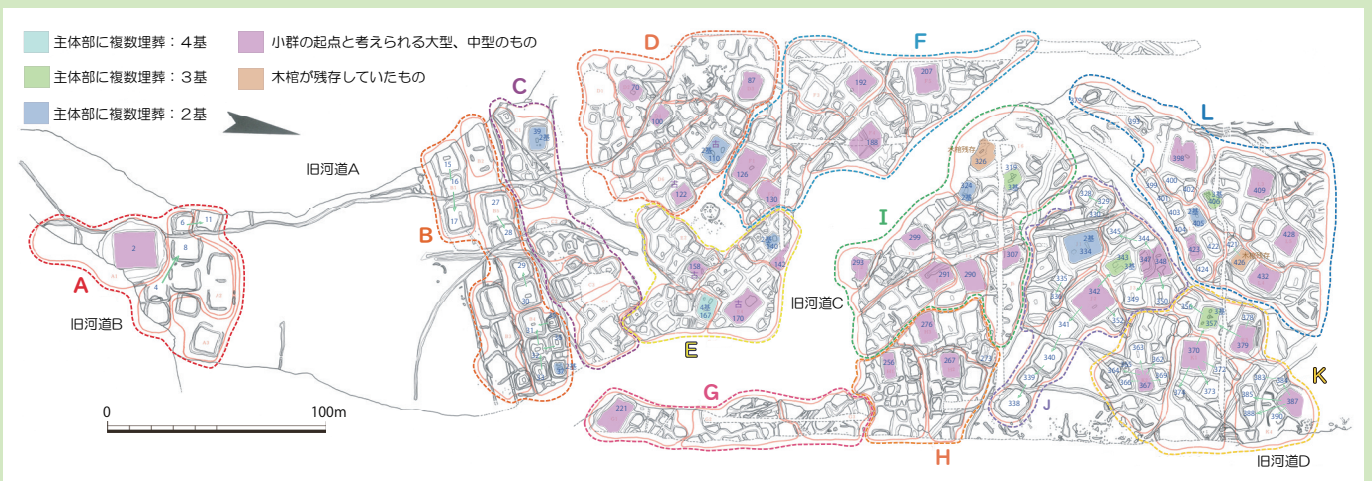
他地域にもまた、それぞれの特徴が見られますが、このような地域間の差異は、稲作を契機に水系毎にムラがまとまる過程で強い共同体意識が形成されたことと関連しており、滋賀県の場合、全周を山地に遮られた盆地の県央に県域の 1/6 を占める琵琶湖が位置する地勢が各地域独自の土器文化を育んだと考えることができます。

鉄器の普及 服部遺跡や下之郷遺跡では、鉄剣をモデルにした磨製石剣が出土しています。鉄器は稲作文化に遅れて日本列島にもたらされますが、弥生時代中期には普及せず、前期に引き続いて、石器が使われ続けます。

この磨製石剣は実用品ではなく、祭祀に使われたものと考えられています。



服部遺跡出土の弥生土器（左）とその他の遺跡の弥生土器（右）



服部遺跡の方形周溝墓の群構成

4 弥生時代後期～ムラからクニへ～

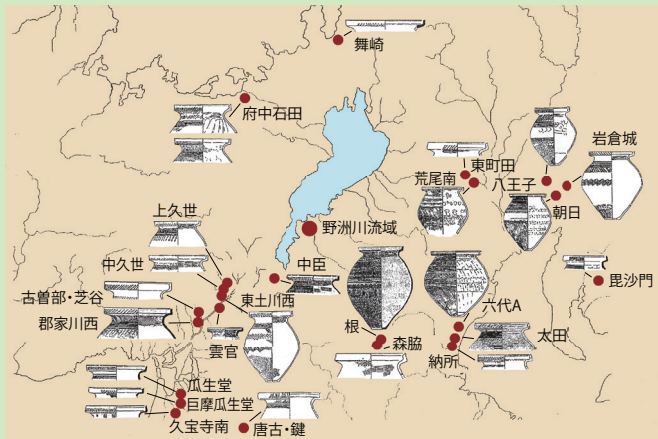
弥生時代後期には、それまでの集落域や墓域などの土地利用が一変するかのような様相を呈しています。こうした変化は中期末から後期初頭に洪水や寒冷化を引き起こした気象変動に見舞われたことが原因と考えられています。

そのような中、後期中葉に伊勢遺跡が出現します。小規模集落が普遍的であったのに対し、伊勢遺跡は広大な集落域の東半に2世紀半ばから後半にかけて、大型建物群が建ち並び、威容を誇っていたことがわかっています。

この頃の東アジア世界では日本は倭国と呼ばれていました。倭国が大いに乱れていた「倭国大乱」、卑弥呼が邪馬台国の王となった「卑弥呼共立」、そして、3世紀の日本に30余りの「國」があったことを『魏志倭人伝』は伝えています。ここで言う30余りの国とは、主に西日本各地で生まれた政治的に結びついた地域連合体と解釈されています。大型建物群の発見を契機に、30余国のうちの一国が野洲川流域を中心とした滋賀県南部に形成され、伊勢遺跡の大型建物群で構成される空間こそが政治や祭祀が執り行われた国の中枢部であったと想定されています。



伊勢遺跡の大型建物群復元図（小谷正澄氏作成）



近江型土器の分布（伴野幸一 2023「伊勢遺跡を俯瞰する」）

このように野洲川流域でもムラからクニへの統合のダイナミズムが顕在化する中、服部遺跡では、弥生時代中後期から古墳時代前期にかけて集落域は移動しながらも依然として形成され続けます。そして、近江（滋賀県）の地域色を体現する受口状口縁甕は後期にかけて隆盛を極め、受口状口縁の採用は甕にとどまらず、鉢や壺、手焙形土器の器種にも及ぶようになります。特に野洲川流域の受口状口縁甕や手焙形土器は近畿・東海・北陸地域など全国各地に波及していて、野洲川流域の発信力の強さをうかがうことができます。

長頸壺・手焙形土器 弥生時代後期に誕生した特徴的な土器として、長頸壺と手焙形土器を挙げることができます。

長頸壺は無花果形の体部に円筒状の長い口頸部がつく壺で、時期決定の指標となっています。

手焙形土器は弥生時代後期後半～古墳時代前期までの限られた時期に少数使われていた謎の多い土器です。浅鉢形の体部にドーム状の覆いが被さった形が近世の手焙用火鉢に似ていることからこの名称がつけましたが、手を温めるために使われた土器ではなく、弥生時代から古墳時代の推移期にあたることから、新たな祭祀や儀礼に使われた土器と考えられています。



長頸壺（服部遺跡）

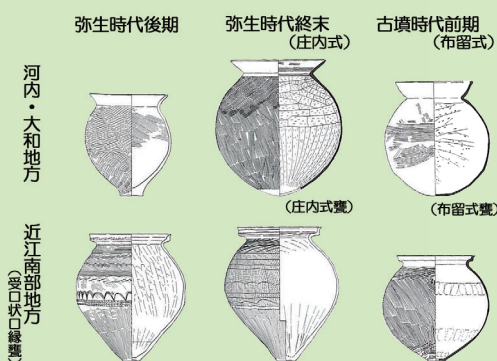
守山市内の手焙形土器

弥生土器の終焉 弥生時代の終末期には、庄内式土器と呼ばれる新しい土器が現れます。この土器は、昭和初期に庄内遺跡（豊中市）で出土したことで名付けられた土器形式です。尖り気味の底部をもち、体部外面を板で叩き、

内面をヘラで削って薄手に仕上げた甕や、表面を丁寧に磨き上げ、直線的な形状となる高坏・器台に代表されます。

庄内式土器は河内地域で誕生し、その後、近畿とその周辺に波及していきますが、滋賀県では、庄内式甕の出土は少数にとどまり、依然として受口状口縁甕が主流を占め、地域色を維持し続けます。ただ、体部は球状化し、平底底部も小さくなり、凸状のあげ底になるなどの形状変化と装飾文様の簡素化が進み、庄内式甕の影響がみられます。

当初、庄内式土器は弥生時代後期（弥生土器V様式）直後に現れる古墳時代初頭の土器として理解されていましたが、現在では、土師器に繋がる弥生時代終末期の土器様式に位置づけられています。



河内・大和地方と近畿南部地方における弥生時代後期～古墳時代前期の土器変遷

弥生土器の変遷

近畿地方の弥生土器は、基本的にⅠ～Ⅴ様式に分類されていて、Ⅰ様式は前期、Ⅱ～Ⅳ様式は中期、Ⅴ様式は後期の時期に使われていました。

服部遺跡では、弥生時代前期から後期の土器が出土していて、野洲川流域の弥生土器の移り変わりを定点観察することができます。

弥生時代前期（Ⅰ様式）

弥生時代前期の土器は、遠賀川式土器と呼ばれています。北部九州から西日本一帯にかけて出土していて、稲作が始まったことの指標となっています。遠賀川式土器は、貯蔵用の壺と煮炊き用の甕の他に鉢や高杯、蓋が揃っていて、縄文土器にはない器種構成になります。



前期（Ⅰ様式）の土器

弥生時代中期前半（Ⅱ・Ⅲ様式）

弥生時代前期には、西日本一帯で齊一的な遠賀川式土器が使われていましたが、中期になると、各地域毎に特徴をもった土器が誕生します。中期後半に誕生する滋賀県特有の土器「受口状口縁甕」の祖形とされる「波状口縁甕」もこの時期に現れます。

基本器種の壺は、^{ひろくちつぼ}広口壺・^{ひろくちちようけい}広口長頸壺・^{さいけい}細頸壺・^{ちようこう}直口壺・^{むけい}無頸壺など、バリエーションが豊かになります。

土器装飾は、前期のへら描文に替わり櫛描文が盛行し、櫛描直線文・波状文・扇状文・山形文などの多様な文様が土器の器面を飾るようになります。



中期前半（Ⅱ・Ⅲ様式）の土器

弥生時代中期後半（Ⅳ様式）



中期後半（Ⅳ様式）の土器

弥生時代中期後半には、基本器種の他に水差しや器台、台付鉢などが新たに加わり、土器の多彩さという点ではピークを迎えます。甕は、近江の地域色を象徴する受口状口縁甕が増加します。

この時期には、^{おうせんもん}凹線文と呼ばれる文様が席卷します。凹線文は瀬戸内地方で生まれ、その後、近畿・東海・北陸地方へと波及し、中期前半に発達した櫛描文と融合し、壺を美しく飾る文様として多用されています。中期後半の方形周溝墓に供献される壺の多くは凹線文と櫛描文で飾られています。

弥生時代後期（Ⅴ様式）

弥生時代後期になると、弥生土器の地域色が弱まり、装飾を施さないく字状口縁甕が近畿一円で使われるようになります。しかし、滋賀県では、中期後半から発達した受口状口縁甕が甕の主流を占めるにとどまらず、鉢



後期（Ⅴ様式）の土器



終末期（Ⅵ様式）の土器

や壺も受口状口縁を具え、^{そな}列点文や波状文などの櫛描文の装飾を施す地域色を維持し続けます。特に、野洲川流域を中心とした地域では下胴に貼付突帯を巡らせた受口状口縁甕がつくられ、近畿や東海などにも波及していきます。強力な地域色の中心核であったようです。

なお、近年はⅤ様式から古墳時代前期の過渡期を弥生時代終末期とし、第Ⅵ様式が設定されるようになっていきます。

5 古墳時代～弥生土器から土師器へ～

弥生時代に続く古墳時代は、前方後円墳の出現する3世紀中葉、あるいは後半から古墳が築造され続けた7世紀代までを時代区分としています。古墳時代の集落は大半が市域南半で見つっていますが、服部遺跡では依然として、古墳時代を通して集落が営まれています。

古墳時代に使われた土師器 古墳時代には、弥生土器の系譜を引く土師器が使われるようになり、中期以降に渡来文化によって誕生した須恵器が普及するようになると、土師器と使い分けられるようになります。

古墳時代前期の土師器は、弥生土器との間に製作技法に差異が認められない漸移的な器種もあれば、新たに加わった器種もあります。

古墳時代前期を特徴づける器種として、小型精製土器を挙げることができます。精良な胎土でつくられた小型丸底壺や浅鉢、これを載せる器台の3器種が一般的で、古墳の墳丘上や集落内の祭場から多数出土することから、儀礼用の土器と考えられています。

また、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての近畿地方では、庄内式土器、それに続く布留式土器が各地域独自の在来土器に代わって、通用化する傾向が見られます。この現象は、ヤマト王権の権威の波及と密接に關係していると捉えられていることから、庄内、布留式土器は政治的な土器ともいえます。



金森東遺跡で検出された古墳時代の集落跡



受口状口縁甕の変遷



弥生後期 弥生終末期 古墳前期

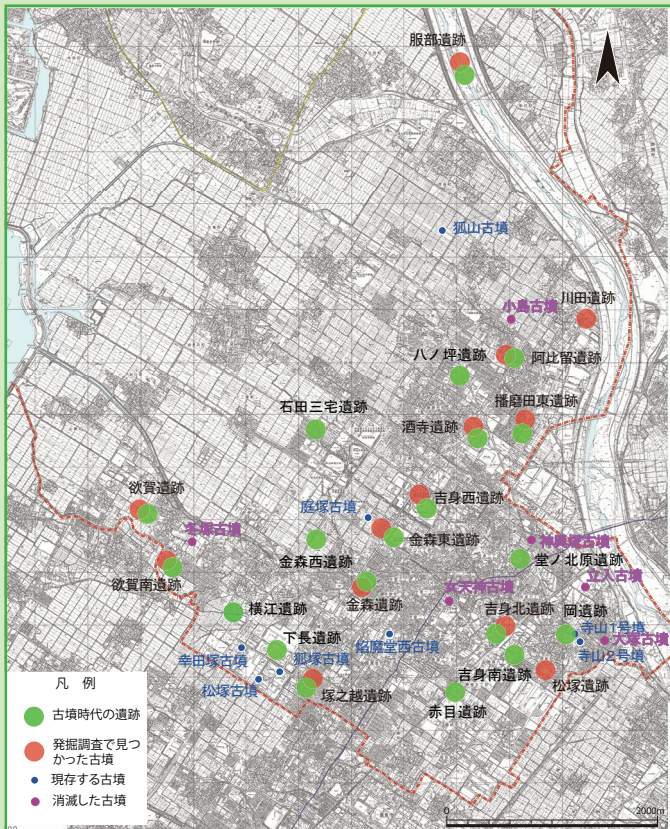
外来系土器 弥生時代中期以降、土器は地域毎に独自性を発達させ、形や文様に鮮明な地域色をもった土器が使われるようになります。

そのような他地域からもたらされた土器を在地の土器に対して、外来系土器と呼んでいます。外来系土器は、本貫地から持ち込まれた搬入土器と本貫地の人々が当



河内産の壺（服部遺跡）

守山市内出土の外来形土器



守山市の主な古墳時代の遺跡・古墳跡

地で作った土器、当地の人が本貫地の土器を模倣したものを包括していて、多様な要素を含んでいます。

弥生時代後期から古墳時代にかけての市内遺跡からは遠隔地の外来系土器が数多く出土していますが、その一方で、滋賀県特有の受口状口縁甕や鉢、手焙形土器が遠隔地から出土していて、活発な地域間交流が行われていたことを知ることができます。

弥生時代後期の服部遺跡では、特徴的な胎土で識別できる河内（大阪府）産の壺や東海地方から持ち込まれたパレススタイルと呼ばれる赤彩を施した壺が認められます。

古墳時代前期の下長遺跡では、近畿地方はもとより、日本海地域や東海地域、瀬戸内地域の特徴をもった外来系土器が出土しています。

ヤマト王権下の琵琶湖は湖上交通によって日本各地域を結節していました。そして、広範な地域の外来系土器や準構造船が出土する下長遺跡は、舟運によって各地の物資が集散する物流拠点であったと考えられます。

6 古墳時代中期～渡来文化の波及～

4世紀から7世紀頃には、以前にもまして、多くの人が朝鮮半島や中国から日本列島に渡って来るようになります。こうした渡来人と呼ばれる人々が携えてきた先進的な文化や高い技術力は、地域開発や土器生産、鍛冶、養蚕、機織りなど、多岐にわたる手工業発展の原動力になりました。



阿比留遺跡 3次調査風景



甗、高坏出土状況（阿比留遺跡）

渡来人の足跡 渡来人の存在は、その独自の住居の検出や所持していた土器、韓式系土器の出土によって推測することができます。守山市内でも、5世紀代の阿比留遺跡（小島町）で、造り付けのカマドを備えた竪穴建物群が検出され、

そこからは壺や把手付き壺などの初期須恵器、軟質土器の甗などの韓式系土器が出土しています。

阿比留遺跡に近接する播磨田東遺跡でも、平底鉢や韓式系土器の軟質土器が出土していて、野洲川左岸一帯に渡来人、あるいはその後裔が居住していたことが考えられています。

また、守山市南域では、野洲川の旧主流であった境川の微高地に所在する下長遺跡、塚之越遺跡（古高町）からも壺や把手付き壺、平底鉢などの初期須恵器や把手付き鍋、煙突形土製品などの軟質土器が



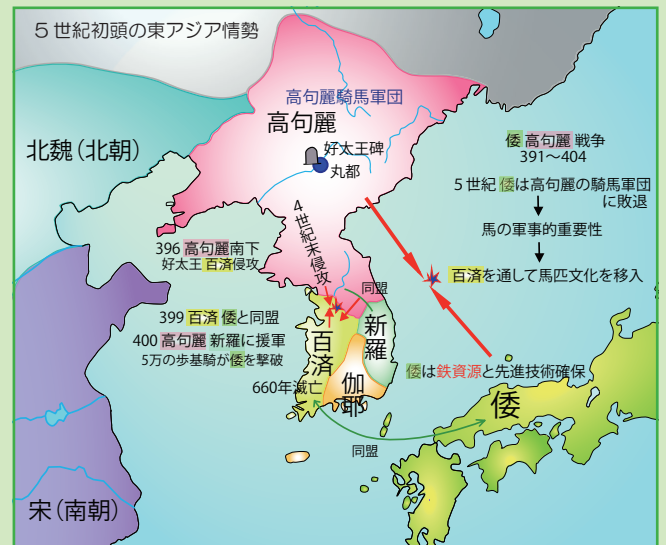
守山市内出土の初期須恵器と韓式系土器

出土しています。さらに守山市中央部の吉身西遺跡でも、渡来人の所持品とされる把手付き壺が出土しています。

このようにヤマト王権はもとより、野洲川流域もまた、先進的な知識と技術を持つ渡来人の関与があった地域、換言すればヤマト王権にとって重要視された地域であったことがうかがえます。

須恵器の波及 朝鮮半島の伽耶などからの渡来人は、いわば国家プロジェクトとして始まった須恵器生産を担っていました。

5世紀前半に、韓式系土器を手本として、日本独自の須恵器生産が始まりました。当初、大阪府堺市～和泉市の丘陵地の陶邑窯での一元的な生産であったのが、猿投（愛知



滋賀県内の主な須恵器生産窯



凡例

- 5～6世紀
- 6世紀～
- 7世紀前半～
- 7世紀後半～8世紀

県）でも生産が始まり、6世紀には、生産技術の習得と地方窯での生産と相まって、地方毎の生産と供給体制ができあがってきます。

須恵器は5世紀末～6世紀にかけての守山市内の集落跡からも普遍的に出土しています。当初の出土品は陶邑窯など限られたところで生産され運び込まれた須恵器と考えられます。しかし、湖南地方でも6世紀初め、甲賀市泉窯で須恵器生産がはじまり、ついで6世紀前半の野洲市から竜王町にまたがる鏡山窯での生産が続きます。

鏡山窯には、「新羅の王子とされる天日槍の従者がこの地で窯業技術を伝えた」との伝承があり、この誕生譚からも、高度の窯業技術を渡来人から取得して須恵器生産が始まったことが想定できます。

守山市内の遺跡でも6世紀には需要が高まり、須恵器が多量に出土します。このように、後に一郡一窯と形容されるほど須恵器生産は拡大していきます。

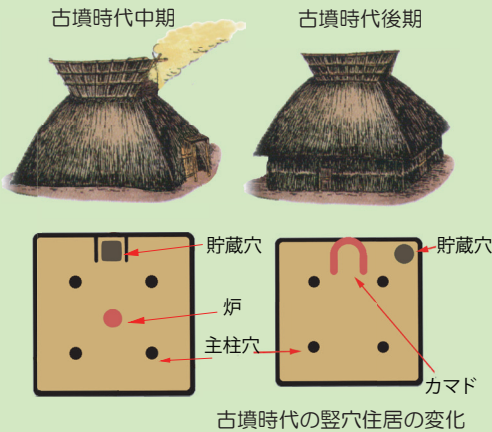
7 古墳時代後期の暮らし～生活様式の変化～

吉身北・南遺跡や岡遺跡などの古墳時代後期の集落の調査からは、人々の住まいた竪穴建物は中期の建物に比べて床面が浅く、幾度も建て替えを繰り返していて、集落も長らく存続したことがうかがえます。また、掘立柱建物も建っていたことから、地表まで屋根が下がる伏屋式の竪穴建物とは違い側壁が立ち上がった外見をもった竪穴建物の復元がなされています。

古墳時代後期には、中期以降にもたらされた渡来文化を象徴する須恵器やカマドによって、調理方法やそれまで土器のすべての器種を賄っていた土師器に変化が起こります。

調理革命 6世紀以降の竪穴建物には、それまで床面中央に設けられ、調理や採光、暖房の役割を担っていた炉に替わって、建物縁辺にカマドが造り付けられるようになり、建物の厨房空間は劇的に変化したものと想像できます。

カマドの導入により、カマド調理に特化した甑や鍋、長胴甕といった土師器の新器種が生まれます。カマドにかけた甕



古墳時代の竪穴住居の変化



土師器と須恵器 (吉身北遺跡)

に底部に孔の空いた甑を載せて、蒸気で「蒸す」という調理法が加わります。甕がそれまでに比べて長胴化するの、蒸しきるための水の容量を確保するための変化だと考えられています。

カマドの調理によって、米を蒸して食べるという調理方法が一般的になり、古代、中世を通して、主食である米は蒸して食することが主流であったとされています。

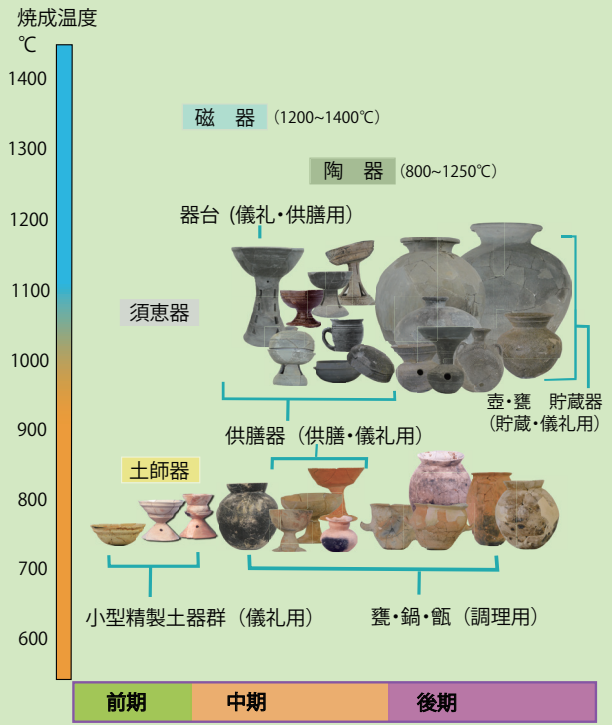
土師器と須恵器 古墳時代中期以降には、日本列島の広い範囲で土師器と、渡来人の窯業技術によって生まれた須恵器の2種類の土器が使われるようになりました。

土師器は野焼きで生産しやすい反面、水漏れや汚れやすいという欠点があります。一方の須恵器は精良な粘土をロクロ成形し、窯で焼き上げるため、強く焼きしまった器に仕上がる反面、火を受けると割れやすい欠点があります。

それぞれの長短所を踏まえ、煮炊きに使う甕や盛りつける坏や高坏は従来からの土師器が引き続き使われるのに加え、新たに導入されたカマド調理に特化した把手付きの甑や鍋も土師器の新器種として登場します。一方の須恵器は、液体の貯蔵器や容器としての壺や甕、提瓶、横瓶、汁気の多い食材を盛り付ける坏などに使われるようになります。

鉄製農具の普及 青銅器や鉄器は、稲作文化に遅れて日本列島に到来しますが、弥生時代中期末までは鉄斧類などの鉄製工具は出土していません。塚之越遺跡の調査では、古墳時代前期の方墳には袋状鉄斧が副葬されていますが、集落跡からは依然として、堅木のカシ材で全てがつけられた鋤や鋤が出土していて、鉄製品は威信財として扱われていたことがうかがわれます。

しかし、古墳時代後期の欲賀南遺跡や焰魔堂遺跡では、木製の鋤先に嵌め込む鉄製鋤先が出土していて、古墳時代中期から普及の兆しを見せていた鉄製農具は、この時期には日常生活にも使われ始めたと考えられます。鉄器の普及によって、可耕地は飛躍的に拡大し、手工業生産もめざましく発達したことが想像されます。



土師器と須恵器の焼成温度の違い



鋤先装着例と遺跡から出土した鋤先

8 埋没古墳から出土した埴輪

3世紀半ばから7世紀の日本列島では、一説には16万基とも言われる古墳が築造されました。

守山市内には現在、古高古墳群をはじめ8基の古墳が現存していますが、墳丘が削りとられた埋没古墳が発掘調査で数多く検出されています。そして、古墳の痕跡である周濠からは円筒埴輪や多様な形象埴輪、木製樹物もくせいいたものが出土しています。

埴輪は、3世紀後半の円筒埴輪の誕生に始まり、4世紀には家形や器財形、動物形埴輪が、5世紀になると、馬形や人物埴輪が登場し、6世紀代まで古墳



馬形埴輪（川田遺跡）

になくなくてはならないものとして墳丘などに並び立てられます。形象埴輪のうち、家形埴輪は被葬者の死後の扱代、器財形埴輪は被葬者の権威の象徴、武具形埴輪は悪霊や災いを祓う目的があり、縦横列に並び立つ人物埴輪や動物形埴輪は古墳で執り行われた葬送儀礼を表現しているとする説などがあります。

守山市内の埋没古墳からは、川田遺跡から出土した馬形埴輪をはじめ、人物埴輪や家形埴輪、囲い形埴輪、甲冑形埴輪、大刀形埴輪など多彩な形象埴輪が出土しています。



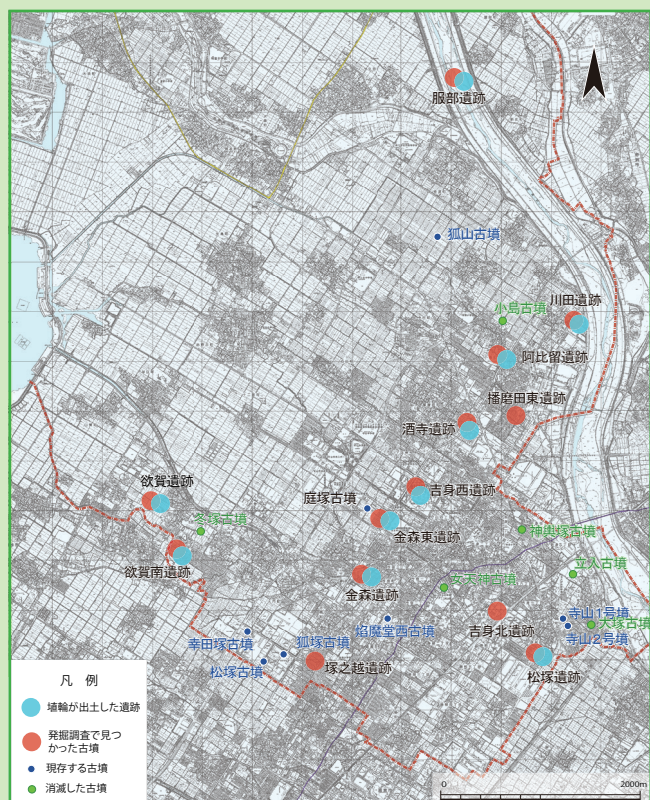
左・中：人物埴輪 右：甲冑形埴輪（阿比留遺跡）

阿比留遺跡 令和6年の阿比留遺跡の発掘調査で古墳の周濠からは、木製樹物や人物埴輪や甲冑形埴輪、馬形埴輪、家形埴輪などが出土しています。人物埴輪は2体分の頭部と右腕、左手それぞれ1点が出土しています。頭部には目尻から頬にイレズミを表現した線刻が見られ、髪型は髪を頭の中央で分けて両側と後頭部に下げた美豆良みずらを結っています。出土した左手は弓尻を握った表現をした弓手ゆんでで、人物埴輪2点の頭部左側にも弓柄先端の痕跡が残存していることから、どちらかと同一個体になるもので、弓を担ぐ軽装の武人を象った人物埴輪と考えられます。甲冑形埴輪は面相部に円孔が穿たれていて、一見、人物埴輪の頭のように見えますが、甲冑をモチーフにした埴輪です。



甲冑形埴輪（松塚遺跡）

大刀形埴輪（松塚遺跡）



守山市の古墳跡・埴輪が見つかった主な遺跡

阿比留遺跡出土の人物埴輪の精巧な造りやイレズミの特徴は奈良県の古墳出土品に酷似しており、ヤマト王権と深い関わりがあったことが推測できます。

松塚遺跡 栗東市に程近い浮気町地先の松塚遺跡でも、埋没古墳の周濠から円筒埴輪をはじめ、甲冑形埴輪や大刀形埴輪、家形埴輪、馬形埴輪が出土しました。古墳の規模やその墳形は解明できませんでしたが、出土した埴輪から5世紀後半に築造されたものと考えられています。

甲冑形埴輪は、昭和と平成の調査の出土品が接合されて眉庇付冑まびさしつきかぶとと呼ばれる冑を象っていることが判明しました。大刀形埴輪は、鹿角で作られた大刀の装具を象った埴輪で、刀把の柄の部分良好に残存しています。棒状突起つかぶちと把縁の間には、サーベルの護拳部にも似た勾金まがりかね（護拳帯）と呼ばれる部分も象られています。

松塚遺跡で見つかった古墳跡は、栗東市側で周知されている亀塚古墳などとともに古墳群を形成していたと推測できます。出土埴輪は、畿内王権中枢の埴輪工人か、その影響を受けた工人が製作したものではないかと考えられます。

9 王のまつり～威儀具の世界

古墳時代に築造された巨大な前方後円墳からは、支配者である首長の権力が飛躍的に強大化したことを知ることができます。首長は自らの権威を誇示するため、あるいは司祭者として祭祀を執り行うため、様々な威儀具を所持していました。

下長遺跡では、儀杖や刀剣の柄頭、団扇形木製品、石釧、鏡といった、実に様々な威儀具が出土しています。儀杖はスギの一木を削り出し、円孔を穿つ円盤に反りながら双方に開く角状突起を持つ先端飾りは、ドーナツ状の帯に両端の幅が広がった帯を交差させ組み合わせた弧帯文と呼ばれる文様が造形されています。また、刀の柄の先端を飾る柄頭は黒漆塗りで、赤彩線刻の直弧文を施しています。



儀杖頭部（下長遺跡）



左：衣笠の立飾り（ハノ坪遺跡）右：想像図

ハノ坪遺跡では、全国初例の衣笠（蓋）の立飾りが見つかっています。古墳から出土する蓋形埴輪からもわかるとおり、立飾りは貴人に差し掛ける柄の長い衣笠の頂上に4枚一組でとりつけた装飾で、カツラ材に弧帯文を彫り込んだ後、黒漆を塗って仕上げられています。

古墳の副葬品として出土する銅鏡も威儀具の代表格で、その大きさや文様に首長の権力が反映されています。守山市内では、主に集落から6点の銅鏡が出土しています。首長が司祭者として執り行った祭祀の道具として用いられたと考えられています。いずれも直径10cm以下の小型仿製鏡と呼ばれる日本国内で鑄造された鏡です。

服部遺跡では、弥生時代後期の堅櫛が出土しています。櫛頭には左右対称の透かし彫りの装飾と巴文を施し、赤色顔料を塗って仕上げられています。堅櫛は髪を梳くというより、髪留めのようにして飾るアクセサリとして使われていたと考えられています。



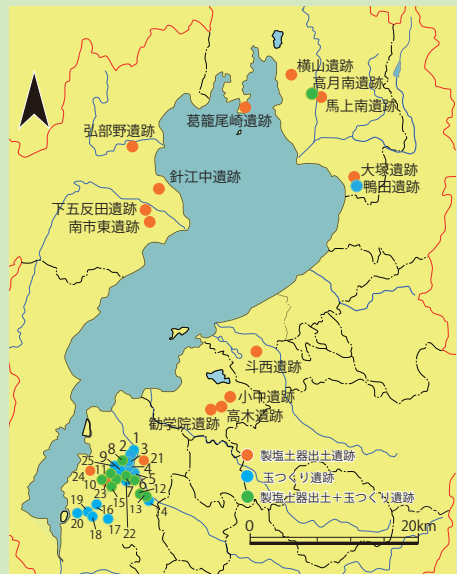
1：金森西遺跡 2～4：下長遺跡（塚之越遺跡） 5：服部遺跡 6：金森遺跡
車輪石（服部遺跡） 石釧（下長遺跡） 銅鏡 琴柱形石製品 柄頭（下長遺跡） 堅櫛（服部遺跡）

10 玉つくりと塩の道

播磨田東遺跡や堂ノ北原遺跡では、古墳時代中期の玉つくり工房跡が見つかっています。勾玉や管玉、白玉などの玉類のほかに、有孔円板、剣形、鏡形、刀子形模造品もつくられています。これは古墳時代中期の一般的な生産パターンで、後期になると、より多くの集落で滑石を用いた玉つくりや滑石製模造品がつくられるようになります。一方、製塩土器が後期になって出土するようにな



玉製品（播磨田東遺跡）



- 1 川原田遺跡
- 2 阿比留遺跡
- 3 播磨田東遺跡
- 4 堂ノ北原遺跡
- 5 益須寺開連遺跡
- 6 岡遺跡
- 7 吉身北遺跡
- 8 吉身西遺跡
- 9 金森東遺跡
- 10 横江遺跡
- 11 古高遺跡
- 12 辻遺跡
- 13 岩畑遺跡
- 14 林遺跡
- 15 蜂屋遺跡
- 16 門ヶ町遺跡
- 17 柳遺跡
- 18 中畑遺跡
- 19 谷遺跡
- 20 御倉遺跡
- 21 市三宅遺跡
- 22 吉身南遺跡
- 23 大門遺跡
- 24 森川原遺跡
- 25 金森遺跡
- 26 金森西遺跡

滋賀県内の製塩土器出土遺跡、玉つくり遺跡の分布図

ります。塩は、若狭地方や大阪湾岸で土器製塩された状態で滋賀県に流通したものと考えられています。

古墳時代中～後期の玉つくり関連遺跡と製塩土器出土遺跡の分布をみると、湖南では野洲川流域に集中しています。湖東、湖北、そして、湖西の遺跡も琵琶湖沿岸に位置していることがわかります。

県内各地の玉つくり関連遺跡は、琵琶湖の湖上交通を介して滑石や碧玉、緑色凝灰岩、ヒスイなどの原材料を和歌山県紀ノ川流域や山陰、北陸地方から入手し、地域消費を主目的とした小規模生産を行っていたと考えられます。

塩と玉つくりの材料は自由交易の産物ではなく、ヤマト王権の管掌下で、湖南や湖北地域の拠点に一旦搬入された後に、周辺集落に分配されていったことが想像できます。

11 古代の守山～律令時代の始まり～

ここでは、都が奈良に置かれた奈良時代と、それに先立つ飛鳥時代、京都に遷都した平安時代を古代と呼んでいます。

646年の改新の詔^{みことのり}によって、天皇を中心とする中央集権国家づくりが始まります。そして701年には、中国の政治制度に倣った大宝律令が施行され、律令国家の道を歩みだします。

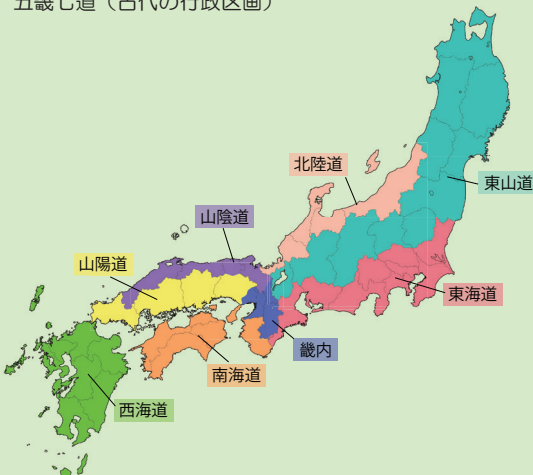
国郡制が布かれ、都と地方の国々に行政区画され、国は郡、里(郷)に細区分されます。公地公民制によって国家の所有となった田畑は班田収受法^{はんてんしゅうじゆうほう}に基づき平民に^{くぶんでん}口分田として貸し与えられる一方、租庸調^{そいうちょう}という租税制度によって徴収した税が国家運営の財源とされました。

守山市は、東山道の近江国(滋賀県)野洲郡と栗太郡に属していた地域の合併によって誕生し、その市域には、野洲郡の8郷のうち、敷智郷、服部郷、明見郷、馬道郷と栗太郡の物部郷が比定されています。



野洲郡域の郷推定図

五畿七道(古代の行政区画)



五畿(畿内): 大和、山城、摂津、河内、和泉

古代の遺跡

発掘調査によって、郷に対応するかのよう^{あかのい}に^{のあぜ}所在する服部遺跡や赤野井遺跡、二ノ畦遺跡、川原田遺跡では、墨書土器^{ぼくしょ}や硯^{すずり}、木簡^{もっかん}といった文字資料が出土しています。識字層が限られていた奈良時代において、多様な文字資料の出土からは古代の役所跡が想定されています。

また、益須寺遺跡は、日本書紀に記載の見られる白鳳寺院・益須寺の建立地に比定されています。

服部遺跡

服部遺跡では、墨書土器^{ぼくしょ}や薄い木の板に墨で文字が書かれた木簡、硯^{すずり}の他にも、乙貞の印刻のある銅印や和同開珎をはじめとする古代の銅銭、役人の階級を示した腰帯に付けられた帯金具など、一般集落ではあまり見ることのない遺物が多数出土しています。



円面硯(服部遺跡)

銅銭(服部遺跡)

銅印(服部遺跡)

このことから奈良・平安時代の服部遺跡には、服部郷関連の役所が置かれていたことが考えられるのです。

赤野井遺跡 赤野井遺跡には、東西2町(約210m)、南北8町(約840m)程の範囲に条里制以前の南北の土地割りが残っています。発掘調査によって、この地割り方向に棟をそろえた6世紀後半から8世紀後半にかけての建物や倉庫約60棟や井戸が見つっています。井戸からは、墨書土器7

点やヘラ描き土器4点が出土していて、古代の赤野井遺跡を解明する上で重要な資料となっています。

ヘラ描き土器は、「赤見」や「大吉」、「左家」などと判読することができます。中でも「赤見」からは、古代の野洲郡に推定されている郷のうちの明見郷がこの地域にあったことを知ることができ、墨書土器の「都家」は港湾倉庫を意味する津屋(つや)の表音文字ではないかと考えられます。

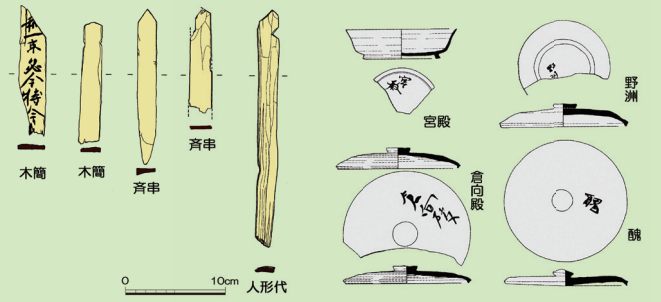


墨書土器「都家」ヘラ描き土器「赤見」「大吉」「左(佐)家」

赤野井遺跡出土のヘラ描き土器と墨書土器

川原田遺跡 川原田遺跡では、奈良時代(8世紀)の溝から大量の文字資料が出土しています。それは木簡や墨書土器、須恵器の蓋を転用した硯などです。

墨書土器には、「宮殿」、「醜」、「野洲」、「口段」、「寺」、「門人」、「仲」、「倉殿」、「倉向殿」、「鈕」などの文字が書かれています。木簡には、「稲一束必令持今口」と墨書きされています。「稲一束」を催促する内容が書かれていると解釈できます。



左：川原田遺跡から出土した木簡 右：墨書土器



二ノ畦遺跡全景

遺跡周辺には敷智郷が想定されていますが、その役所に関わるのが川原田遺跡であったかもしれません。

二ノ畦遺跡 吉身三～四丁目には、古代の幹線道路・東山道が東西に伸びており、その隣接地に二ノ畦遺跡が所在しています。ここでは、奈良時代後半の整然と軒を揃えた掘立柱建物 20 棟や墨書土器、須恵器を転用した硯などが見つかっていて、役所関連の施設と考えられています。

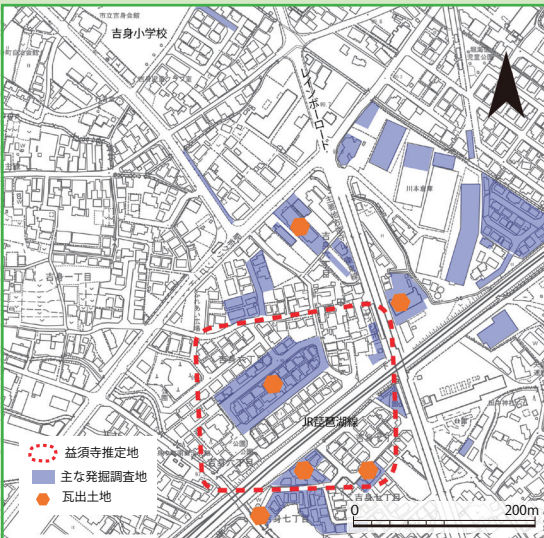
益須寺遺跡出土の瓦



白鳳寺院 益須寺 『日本書紀』持統天皇7年(694)、8年の条には益須寺の記載がみられ、「近江国益須郡の都賀山に病気の治療に効くという醴泉が湧いている。使いを遣わして試飲させたら効能があったので、病人の逗留所となっていた益須寺は、持統天皇から褒美として、水田4町や布60端を賜った。」と要約することができます。

白鳳時代には、中央集権国家づくりのための政策として、仏教を国教と定め、寺院が建立されるようになります。益須寺もその一つで、発掘調査で飛鳥～奈良時代の瓦がまとまって出土している吉身六～七丁目が建立地と推定されていて、益須寺遺跡として周知されています。

益須寺の「益須」は現在の野洲と同じく「やす」と発音します。字は異なりますが、郡の名前がつく郡名寺院で、県内には、志我山寺(志賀郡)や甲賀寺(甲賀郡)、蒲生寺(蒲生郡)などの古代の文書に見られます。郡名寺院はその地域を治める豪族の氏寺の場合が多く、益須寺もまた、野洲郡の有力豪族であった安氏(安国造)の建立した寺院で、出土する複弁蓮華文軒丸瓦から奈良時代中頃に寺観整備が行われたと考えられています。



益須寺遺跡の位置図

12 中世の守山～村落の形成～

およそ鎌倉幕府が置かれた鎌倉時代から室町時代を中世と呼んでいます。中世の守山は、農業生産性の高さで陸上・湖上交通の要衝として、より一層栄えることになります。

横江遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての中世集落のほぼ全体を発掘調査しました。その成果によって、守山の集落形態の変遷をⅠ～Ⅳ期に復原することができました。

Ⅰ期(平安時代後期) 石田三宅遺跡や長塚遺跡で11世紀後半代の有力農民層の屋敷跡が見つかっています。まだ分散居住の段階です。

Ⅱ期(鎌倉時代) 12～13世紀には、集落数は増加していきますが、依然として分散居住し、散村的な様相を呈しています。



横江遺跡全景

III期 (13世紀後半～14世紀代) この時期には、有力農民層の屋敷を核として集村化し、区画溝が巡った屋敷地が密集する集落景観が生まれます。横江遺跡を例にすると、計画的に屋敷地割された各屋敷地には主屋の他に副屋や井戸が付設されています。屋敷地の規模には違いがあり、最も広い屋敷地からは中国製の高価な磁器などが見つかっていて、集落の有力者が居住していたと考えられます。

IV期 (15世紀代) 欲賀城遺跡のように領主居館と集村集落域に堀を巡らせる集落も出現します。集村化と同時に、より地縁的な繋がりが強い集落へ、そして惣村に発展していったと考えられます。そ



欲賀城遺跡全景

の後、中世集落の多くは衰退、廃絶し、現集落の祖型が生まれたと考えられます。

このように13世紀後半～14世紀代になると、それまで分散居住していた家々が有力農民層の屋敷を核として集村化した集落景観が生まれます。欲賀城遺跡でも、横江遺跡同様、鎌倉時代には溝で区画された屋敷地割があり、室町時代には、集落全体を囲む「堀」が巡らされます。かつて欲賀には「城」があったと伝承されていて、こうした堅固な集落は、それを傍証するものなのかもしれません。

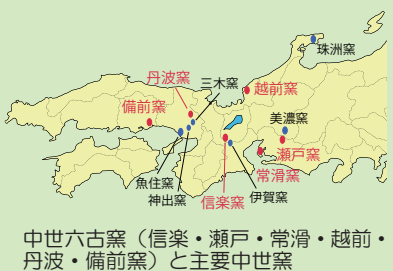
中世集落の発掘調査によって、集落の移り変わりとともに、人々の生活を復原することができました。



横江遺跡出土した生活品



播磨田城遺跡出土の遠隔地の土器・陶器



中世六古窯(信楽・瀬戸・常滑・越前・丹波・備前窯)と主要中世窯

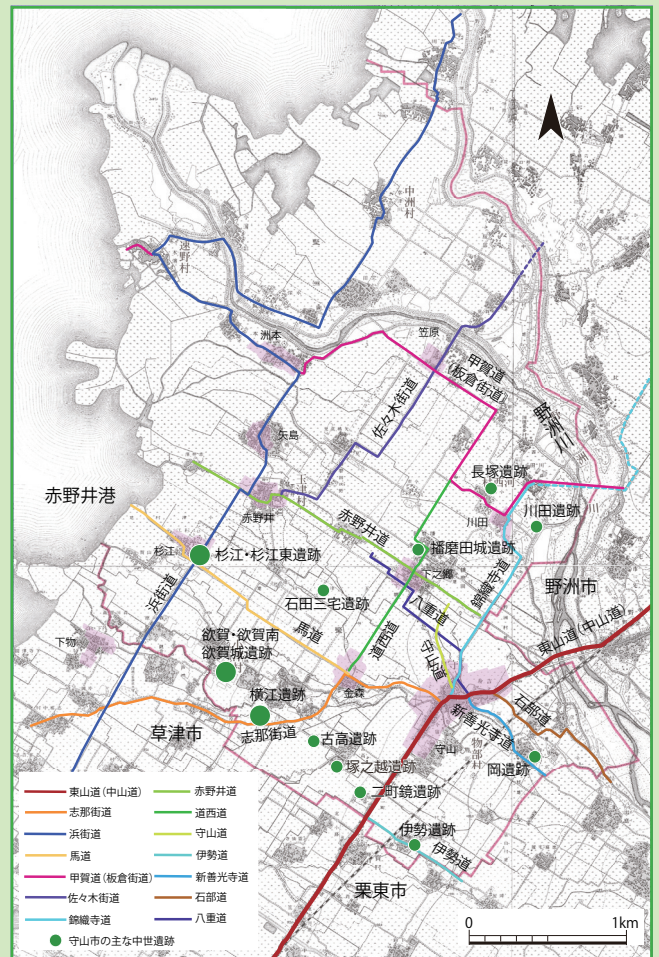
遠隔地の土器、陶器(欲賀遺跡、欲賀城遺跡)

横江遺跡や欲賀城遺跡、播磨田城遺跡の出土品を見ると、日常の食器は、黒色土器碗と大小の土師器皿が基本で、漆器の碗・皿も出土していることから、飯碗は黒色土器碗、副食用の土師器皿に漆器碗が加わり、一汁二菜、あるいは三菜の食生活を送っていたと想像できます。

調理具には、土師質や瓦質の脚のついた羽釜や鍋、土製焙烙、中世六古窯の信楽焼や常滑焼の摺鉢、瀬戸焼のおろし皿の他、東播磨産の捏鉢も出土しています。貯蔵容器には、常滑焼や信楽焼などの壺、甕と木製の曲物が使われていたことがわかりました。

欲賀遺跡では、「古瀬戸」の平碗や天目茶碗、緑釉小皿、折縁深皿や直縁大皿、柄付片口、瓶子や花瓶、他には香炉、合子といった調度品や磁器も出土しています。磁器では、初期伊万里、13世紀～15世紀後半の中国産の輸入磁器も見られます。

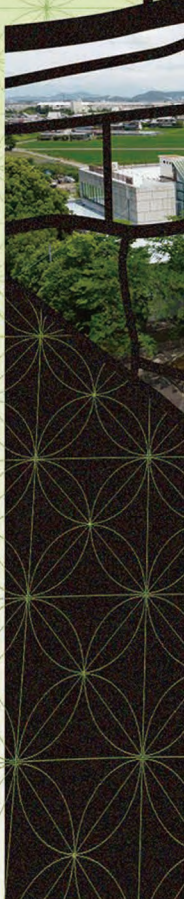
このように、守山には、西日本から東海地方の陶器や、中国などの海外製品までもがもたらされていました。都が置かれた京都に隣接し、主要街道が滋賀県に集まり、琵琶湖の湖上交通と結節していることや早くから惣村が発達していたことがこのような出土品に反映されています。



守山の中世の古道

守山市遺跡年表

縄文土器が使われる 貝塚の形成	57	殷	縄文時代	BC8000	赤野井湾遺跡で集落が営まれる	
亀ヶ岡文化が発達 北部九州に稲作が伝来	107	西周	弥生時代	BC3500	経田遺跡(今宿町)で生活跡が見つかる 下長遺跡(大門・古高町)で竪穴住居を検出 吉身西遺跡(守山町)で集落が営まれる	
弥生土器が使われる 西日本に稲作が波及する	239	春秋 戦国		BC1000	播磨田城遺跡(播磨田町)で土偶が出土	
青銅器の祭祀 鉄器の使用		秦	原	BC400	服部遺跡(服部町)で水田がつくられる	
鏡を埋納する墓が現れる		前漢	始	BC100	播磨田東遺跡(播磨田町)で玉づくりが行われる	
環濠集落が出現		新	代	紀元	下之郷遺跡(下之郷町)で環濠集落が営まれる	
高地性集落の形成 奴国王が金印を授かる 倭国王が後漢に遣使	57	後漢		100	山田町遺跡(勝部・焰魔堂町)で集落が営まれる	
倭国大乱 卑弥呼が魏に遣使	239	魏 蜀	古墳時代	200	伊勢遺跡(伊勢・阿村町他)で独立棟持ち柱建物がつくられる	
土器器が使われる 大和王権による政治支配		西晋		250	益須寺関連遺跡(吉身町)などで前方後方型周溝墓が築かれる	
大型古墳の築造 渡来人の移住が進む 須恵器の使用 農具の鉄器化が進む		東晋		300	下長遺跡で儀杖などの威儀具が出土	
		北魏		400	八ノ坪遺跡(播磨田町)で衣笠の立飾りが出土	
磐井の乱		宋		500	阿比留遺跡(小島町)に渡来人が居住	
仏教の伝来	538	(齊)		500	川田遺跡(川田町)で古墳から馬形埴輪などが出土	
		北周		500	堂ノ北原遺跡(吉身町)で玉づくりが行われる	
		梁		500	吉身北・南遺跡(吉身町他)で大集落が形成される	
		隋		600	飛鳥時代	
遣隋使の派遣	600		古	600	奈良時代	
大化の改新	645			700	700	益須寺遺跡(吉身町)で白鳳瓦が出土
近江大津京に遷都	667			700	二ノ畦遺跡(吉身町)で奈良時代の役所が見つかる	
壬申の乱	672			700	赤野井遺跡(赤野井町)で役所や墨書土器が見つかる	
大宝律令	701			800	服部遺跡で銅印「乙貞」が出土	
平城京に遷都	710			800		
紫香楽に都を造営	742			800		
平安京に遷都	794			800		
遣唐使の廃止	894			900	平安時代	
平将門の乱	939			900	川原田遺跡(川田町)で墨書土器や木簡が出土	
藤原道長が摂政となる	1016			1000	笠原南遺跡(笠原町)で墨書土器が出土	
白河天皇の院政	1086			1000		
保元の乱	1156			1100		
平治の乱	1159			1100		
鎌倉幕府が成立	1158			1100		
承久の乱	1221			1200	鎌倉時代	
文永の役	1274			1200	1200	横江遺跡(横江町)や欲賀城遺跡(欲賀町)で 中世集落が形成される
公安の役	1281			1200		
永仁の徳政令	1297			1200		
建武の新政	1334			1200		
室町幕府が成立	1338			1300	中世	
南北朝が合一	1392			1300	1300	勝部神社本殿の再建(1399) 欲賀遺跡(欲賀町)で集落が発達
金閣寺建立	1397			1300		
日明貿易	1401			1300		
				1400	室町時代	
				1400	1400	下新川神社銅鐘が鑄造される(1419)
応仁の乱	1467			1400		
鉄砲が伝来	1543			1500	1500	蓮如が金森に滞在 小津神社本殿の再建(1526)



歴史のまち守山HP

守山市立埋蔵文化財センター

〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL & FAX 077(585)4397

maizobunkazai@city.moriyama.lg



遺跡分布地図